ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』第11挿話(新訳と注解)-その2

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2011-01-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小川, 美彦 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/8877

ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』第一一挿話（新訳と注解）——その二

小川美彦

凡例

＊印は将来において注解を付ける個所を示す。

割注に〔訳〕とあるのは「訳者の注」の意味である。そしてそれは、Weldon Thornton : Allusions in *Ulysses*. An Annotated List.

Don Gifford with Robert J. Seidman : Notes for Joyce. An Annotation of James Joyce's *Ulysses*.

以上二冊の注釈書の注の訂正および一部加筆、もしくは新しく書き加えた割注であることを示す。

割注に例えば32、1—60とあるのは、それぞれ第一一挿話その二、その一の参照すべきページ数を表わしている。

略字として、Ir＝Ireland　D＝Dublin　B＝Bloom　M＝Molly　を用いた。

聖書よりの引用や言及は原則として Douay Version の章節による。また聖書からの引用句の訳文は英国聖書協会の文語訳を用いたが、一部訳者が手を加えたところもある。

アイルランドの人名、地名の発音については、すでに英語化したものは英語読みにした。

肝臓〔1—190〕をたいらげた皿から眼をあげたまま、ブルームは首をかしげて見ていた。「もうなにもかもおしまいだ」という顔。リッチはむかしはよくふざけたものだ。冗談もいまでは錆びついてきたが。耳を動かす。ナプキンリングを片眼鏡のかわりにする。それがいまでは無心の手紙を息子にもってゆかせる。やぶにらみのウォルタがいつもの調子で、お父さま、はい、たしかに、お父さま、ってやる。突然で申しわけありませんが、入るはずの金子がはいらなくなったものですから。ながながと弁解する。

またピアノ。この前聞いたときよりも音がいい。調律のせいだ、たぶん。またやめた。

ドラドとカウリ〔1—189〕は、ためらう歌い手にやれ、やれと執拗に迫った。

——さあ、サイモン。

——やれよ、サイモン。

——紳士、淑女諸君、わたくしはみなさんの心からなる要請にひどく感激いたしました。

——いいぞ、サイモン。

——わたくしは金と縁のない男ではありますが、もしみなさんがこの拙いわたくしの歌に耳をおかしくださるなら、「うちひしがれし心」の歌を精いっぱい唄ってお聞かせしましょう。*

サンドイッチの入った鐘形のガラス容器〔1—171〕のそばで薄暗がりにつつまれて、リディア〔1—188〕はブロンズの頭〔1—165〕と乳房の薔薇の花〔1—179〕とを淑女よろしく〔1—188〕しとやかに〔1—169〕相手に差し出し、そしてためらい、また涼しい海緑色のナイル・グリーン〔1—183〕の影の中で、マイナ〔1—186〕はマイナでジョッキふたつ〔1—187参照〕にむかって金髪を幾重にも巻きあげた頭〔1—187〕をさげ、そして上げた。

ひとしきりハープの手つきで演奏された前奏部の和音の流れがやんだ。うながすようにながく響くひとつの和音が声を誘

い出した。

――「か*の愛らしき姿はじめて目のあたりにせしとき〔1―159〕……」

リッチはふりむいた。

――サイ・ディーダラスの声だ、と彼はいった。

頭のしんが快くしびれ、頬をほんのり紅潮させて彼らは耳を傾けた、「かの愛らしき姿」のあたえる感動のうねりが全身の肌のうえを走り、手足のさきざきまで、ひとの心、魂、体のすみずみまでうち寄せるのを感じながら。ブルームがパットに、禿頭のパット〔1―188〕は耳の遠い給仕、バー〔1―183〕のドアをすこし開けてくれと合図をした。バーのドアだ。そう。それでいい。給仕のパットもとにかく待った〔1―179〕、じっと待った、聞こうとして、彼は耳が遠かったのでドアのそばで歌を聞こうとして。

――「わが胸の悲しみ消えうせる思い。」

静まり返ったあたりの空気をついて、歌声が聞こえてきた、低い、だが雨音でもなく、木の葉のざわめきでもなく、弦楽器や管楽器やあのなんといったっけ、梯形(ていけい)チェンバロみたいな楽器の音色とも違う声が、言葉をともなってふたりのすました耳にとどき、研ぎすまされたふたりの心をゆさぶって、それぞれの胸に過ぎし日のことどもを思い出させた。なかなかいいね、聞かせるじゃないか――彼らそれぞれの「胸の悲しみ」が、ふたりともはじめて聞いたときから「消えうせる思い」がした。ふたりが、「おしまい」になったリッチとポウルディ〔1―183〕とが美女の慈悲の温顔を「はじめて目のあたりにせしとき」、その女性から、はじめてのまったく予期しない慈悲深い、愛情のこもったやさしい、しばしばあたたかい告白の言葉を聞いた。

恋が歌っているのだ、『恋*のなつかしきやさしの歌』を。ブルームは買いもの〔1―174参照〕をしばった輪ゴムをゆっくり

ほどいた。「恋のなつかしきやさしの」、ゴールドを鳴らせ（ソンネ・ラ）〔1—179〕。ブルームはフォークのようにのばした両手のそれぞれ二本の指のまわりにひと絽（かせ）の糸みたいに輪ゴムをまき、それを引きのばし、そして緩め、それから手の狼狽をよそに二重、四重、八重と身動きできないほどしっかり縛りあげた。

——「希望に満ち、悦び身にあふれぬ……」

テナー歌手は女に不自由しない。それがまた彼らの声の流れをよくする。舞台のあの人に花を投げるのよ。ぜひまたお会いしたいわ。あたしの「頭はむしょうに」〔第四挿話で初めて出る俗語の一部〔訳〕〕。チャリン、チャリン〔1—188〕「悦び身にあふれ」。彼〔ボイ〕は男ばかりがいるところではうまく歌えない。「おいらの頭はむしょうに」ふわらつく。「あの人のために」〔「ラウルのために」〔1—163〕の前に来る文句〔訳〕〕香水のにおいをぷんぷんさせて。「あなたの奥さんどんな香水を」〔マーサの手紙の文句〔訳〕〕？「あたし知っておきたいの」〔同上〕。チャリン。とまる。ノック。ドアを開ける前に、いつも鏡にむかって最後の化粧なおし。玄関でのやりとり。あら。いかがですか？　元気ですわ。そこにお掛けくださいまし。え？　ここでは？　そういえば彼女の手さげ鞄の中に小瓶の口中錠、香料入り糖菓が。いいかい？「両手は探り求めた、豊満な」〔『邪淫の蜜』〔1—162〕から〕。

ああ〔1—159〕、声は一転して、深いため息をつきながらひときわ高まった、高らかに、ゆたかに、朗ろうと、自信にみちて。

——「されど、ああ、それも束の間の夢……」

彼の声はまだ捨てたもんじゃない。コーク〔Irのもっともに南にある郡および市〔訳〕〕の空気はやわらかだが、あの地方の訛も。馬鹿な男だ！　巨万の富を築くこともできたのに。歌詞が間違っている。妻君はぼろぼろに疲れはてて死んだ、いまなに喰わぬ顔で歌っているが。だが、そうもいいきれないぞ。夫婦のことは他人にはわからない。もし過労で倒れなければ。競馬場ではもう通用しない。彼の手と足もうたっている〔アル中による震えを面白くいった〔訳〕〕。酒びたり。疲れきった神経。歌うのはきっと節制になる。ジェニ・リン*

ド式スープ――ブイヨン、サルビア、生卵、半パイントのクリーム。クリームみたいな「夢」を作るために。

恋情を誘いだしながら声が溢れてきた、じょじょに高まりを見せて、声量ゆたかに〔1―159〕うち震えた。さすがだ。ああ、ゆくぞ！　きて！　動悸また動悸〔同上〕、鼓動する自信にみちた勃起。

歌詞のせいかな？　曲のせいかな？　いや、その裏にあるもののためだ。

ブルームは輪ゴムで締めつけ、ゆるめ、結び、ほどいた。

ブルーム。なま温かい、ぞっとする舐めつくすような秘密の奔流が溢れ出て全身にひろがり、曲として、情欲としてあふれ出て、暗く舐め流れた。彼女〔M〕にちょっとさわり、彼女に軽くさわり、彼女にちょいとさわり、彼女の上に重なる。重ねもち〔同上〕。毛孔がひろがりながら拡がる。重ねもち。その歓喜、その感触、そのなま温かさ、その。重ねもち。水門をこえて、ほとばしる噴出をほとばしらせる。奔流、ほとばしり、うねり、歓喜のほとばしり、重なる群。まさにこの情感だ！　愛の言葉。

――「……希望の光……」

喜びに輝いて。リディア〔84〕はリドウェル〔1―188〕にほとんど聞きとれない気どった小さな甲高い声〔ダウスの声は元来ふとい。1―166参照〔訳〕〕、きわめて淑女よろしく〔84〕、ミューズとして小さな甲高い声で、大きな「希望の光」を与えた。

『マーサ』〔『マルタ』の英語読み名。「マ」〔1―189〕の注参照〕だ、このオペラは。偶然の一致〔1―174〕。ちょうど手紙を書こうと思っていた〔1―170〕。ライオネルの歌だ。あなたのすてきなお名前〔第五挿話参照。マーサの手紙では、美しいお名前。〕。うまく書けそうもないな。ささやかな額ではありますが、ぼくのプレゼントをお受けとりください。彼女の心の琴線にふれ、あわせて財布の金欲線も鳴らさないと。彼女はきっと〔しまり屋〕。「わたしあなたのことをいじわる坊やと書いてあげたのよ」〔同上〕。それにしても名前がマーサ〔1―170〕とは。ほんとうに奇妙だ！　今日という日は。

ライオネルの声がまた聞えてきた、以前よりも弱よわしく、だがいぜん弱りはしない声で。それはふたたびリッチ〔85〕、ポウルディ〔同上〕、リディア、リドウェルにむかって歌いかけ、またとにかく待とうと待っているパット〔85参照〕、大きくあけた口と耳にむかって歌いかけた。「かの愛らしき姿はじめて目のあたりにせし」〔85〕こと、悲しみ消えさる思い〔同上参照〕のこと、かのまなざし、姿、告白の言葉〔85〕が彼グールド〔1—192〕・リドウェルを陶然とさせ、パット・ブルームを魅了したことを。

やはり歌い手の顔が見えたほうがいい。そうすれば歌ももっとよく理解できる。ドラゴウ理髪店〔D市南岸、中心部のドースン・ストリート一七号店（パリ風香水販売も）と、北岸中心部の（ヘンリ・ストリート三六号店（製メーカーを兼ねる）を経営するアドルフ・D・の店〔訳〕〕の店員が、僕が鏡にうつったその顔に話しかけると、きまってこっちの顔をまじまじと見るのもそのためだ。だが、歌を聞くには、遠くてもここの方がバー〔85〕よりはましだ。

——「やさしき眼差しに……」

テレニュア〔D市南郊外の地区〕のマット・ディロン〔D市の市参事会員マシュー・D・〔訳〕〕の家で彼女を「はじめて目のあたりにせし」最初の晩。彼女は黒いレースでふち取りした黄色のドレスを着ていた。椅子とり遊戯〔人数より一脚すくない椅子を音楽が止まった瞬間に奪いあう遊び〔訳〕〕。ぼくたちふたりが最後まで。不思議なめぐり合わせ。彼女のあとを追いかける。めぐり合わせだ。ぐるぐるゆっくりと。つぎに早いテンポ。僕たちふたりだけ。みなが見ていた。とまる。さっと彼女が腰をおろした。おろされた連中が見ていた。彼女の唇が笑っていた。黄色いドレスにおおわれた膝がしら。

——「われしばし見とれぬ……」

あのとき彼女は歌ったっけ。『待ちこがれる*』だった。僕が楽譜をめくってやった。ライラックの香り、「あなたのどんな香水を」〔86〕、ふんぷんと漂うところで聞いた豊かな声。乳房を僕は見た、両方ともむっちりと豊かな、声を震わせて歌っていた〔1—159〕喉。「はじめて目のあたりに」。彼女は僕にありがとうと云った。なぜよりにもよってこの僕に？　不思議

なめぐり合わせ。スペイン娘みたいな眼。『過ぎし日のマドリッドで*』、片側が日陰になったこんな時間のスペイン風中庭、梨の木のしたでただひとり、ドロウリス〔1—186〕、彼女ドロウリス。僕にむかって。誘惑的に〔1—159参照〕。おお、魅惑的に〔1—159〕。

——「マーサ！〔同上〕ああ、マーサ！」

甘い追憶からさめて、ライオネル〔87〕は低くなる、だが強さのます連続的な協和音にのって、恋人に帰りきたれと、断腸の、圧倒的な情熱の叫び声をあげた。彼女に知ってもらいたい、マーサに感じてもらいたいと、ライオネルの孤独な叫びをはり挙げて。彼女だけを彼は待っていたのだ。彼女はどこに？　ここ、そこ、そこここをさがせ、みながどこかと探す。どこかに。

——「帰りきたれ〔1—159〕、去りゆきし君よ！

帰りきたれ、いとしの君よ！」

ただひとり。ただひとりの恋人。ただひとつの希望。僕のただひとつの安らぎ。マーサ、これは胸声音だ、もどれ。

——「帰りきたれ！」

曲は一羽の鳥のように舞いあがり、天翔（あまがけ）って、束の間のすんだ叫び声、銀色の軌道を画いて高く飛び、悠然と跳躍いちばん、速度を増して、滑るように飛びつづけた、「帰りきたれ」と、息をあまりながながとひき伸すな、彼は長生きするほど息が、高くたかく飛び、天空高くきらめき、燃えるように輝き、光をいただいて、高く象徴的な光彩の中を、高く、天界の抱擁の中を、高く、いたるところの高い膨大な発光の中を、あらゆるものが万有のまわりをぐるぐると、無限なるもののものへと。

——「わがもとに！」

サイオポウルド〔サイモン＋ライオネル＋リアポウルド〔訳〕〕！

精魂を使いはたして。

「帰りきたれ」。みごとなものだ。みなが拍手した。彼女は「帰りきた」る。べきだ。僕のもとに、彼のもとに、彼女のもとに、あなたのもとにも、僕、僕たちみんなのもとに。

――ブラボー！　ぱちぱち。たいしたものだ、サイモン。ぱちっぱち〔1―159〕ぱち。アンコール！　ぱちぱりぱち〔同上〕。えらい勢いだ。ブラボー、サイモン！　ぱちぱら〔同上〕ぱち。アンコール、アンぱち、といった、叫んだ、拍手したみなが、ベン・ドラド、リディア・ダウス〔1―188〕、ジョージ・リドウェル〔同上〕、パット〔88〕、マイナ〔84〕、マイナ・ケネディ〔1―186〕、ふたつのジョッキ〔84〕を前にしたふたりの紳士〔1―187〕、カウリ〔84〕、ジョッキを手にもった第一の紳〔1―187〕とブロンズのミス・ダウスとゴールドのミス・マイナが。

ブレイジズ・ボイランのいきな赤靴はバーの床の上できゅっきゅっ鳴った〔1―176〕、すでに述べられたことだが〔1―188参照〕。二輪馬車は、サー・ジョン・グレイやホレイショウ・片腕ネルソンやシアボールド・マシュー神父さまの記念像のそばを、すでに述べられたように足なみ軽く〔1―192〕、ちょうどいま通過した。跑足（だく）で〔1―186〕、暑いさなかを暑くなった席〔1―186参照〕に坐りながら。鐘（クロッシュ ソンネ・ラ）を鳴らせ。鐘（クロッシュ ソンネ・ラ）を鳴らせ〔1―179〕。牝馬〔1―186〕は坂道にさしかかって速度を落し、ロウタンダ産院、ラトランド広場〔現在のロウタンダ広場。〔訳〕〕のそばをのろのろと登っていった。ボイラン、こん畜生ボイラン、じりじりボイラン〔1―186参照〕にしてみれば我慢できないほどのろのろと、牝馬は体をゆさぶりながら進んでいった。

カウリの弾き鳴らす和音の残響が消えた、あたりに豊かな余韻を残して。

それからリッチ〔88〕・グールディングはパウァ・ウィスキー〔1―190〕を飲み、それからリアポウルド・ブルームは飲んだ、林檎酒〔同上〕を、リドウェルはギネス〔Irの産業界を代表するギネス醸造会社の黒ビール〔訳〕〕を、第二の紳士は、かまわなければもうジョッキ二杯

いただけませんか、といった。ミス・ケネディはジョッキをさげながら、珊瑚色の唇をほころばせて、第一と第二の紳士にそれぞれ作り笑いをしてみせた。彼女はかまわなかった。

――パンと水だけで〔酒びたりの罰として〔訳〕〕、とベン・ドラドは云った、ブタ箱に一週間いる。するとサイモン、あんたはきっとうたつぐみみたいなすごい歌手になるぜ。

歌手のライオネル〔89〕・サイモンは笑った。ボブ・カウリじいさん〔1―190〕はピアノをひき始めた。マイナ・ケネディが客に出した。第二の紳士が支払った。トム・カーナン〔セイロン紅茶の代理商セールスマン〔訳〕〕が気取った足取りではいってきた。リディアは見そめられ、見そめた。だが、ブルームは無言で口ずさんだ。

聞き惚れて。

リッチは聞き惚れて、あの男のみごとな声をながながと誉めたたえた。彼はずっと以前のある晩のことを思い出した。あの晩のことはぜったい忘れない〔1―191〕。サイ〔85〕は「高位と名声」*を歌った、ネッド・ランバート〔ディーダラスの友人・市中心部のメアリズ・アビ・ストリートの穀物商G・J・アリグザンダに勤める〔訳〕〕の家でだった。いやまったく、彼はこれまでぜったいに〔1―192〕あんな声を聞いたことはなかった〔1―159〕彼はぜったいに〔1―191〕「されば不実の女よ別るるにしかず」きわめてすんだきわめてまったく彼はぜったいに聞いたことはなかった「汝の愛情の死に絶えしがゆえに」すばらしい声「死に絶えし」ランバードに聞いてみろよ彼も同じ意見だぞ。

グールディングは蒼白いに赤みを見せはじめ、顔、ミスタ・ブルームにむかって、サイがネッド・ランバートの、ディーダラス、家で「高位と名声」を歌った晩のことを話した。

彼、ミスタ・ブルームは、彼、リッチ・グルーディングが彼、ミスタ・ブルームに、彼、リッチが彼、サイ・ディーダラスが彼、ネッド・ランバードの家で「高位と名声」を歌うのを聞いた晩のことを話すのをじっと聞いていた。

義理の兄弟、親戚だ。が、擦れちがっても、声をかけることのないふたり。どうやら疎遠のきざし。彼なんかには洟をひ

っかけるのもいやだという態度。それがだ。かえって彼をほめそやす。サイが歌った晩のこと。人間の声、ふたつの小さな絹みたいな声帯、ほかのどんなものも及びもつかないほどすばらしい。

あの声には悲嘆の響きがあった。いまはだいぶ静まってきた。歌のあとの静寂の中で、はじめていま聴いた歌を感じる。振動のせいだ。いまはあたりが静寂に。

ブルームは組みあわされた両手のいましめを解き、自由な指でほそい輪ゴム〔86〕のひもを爪びいた。彼はぴんとひっ張って爪びいた。ひもはぶんぶん唸り、びーんと鳴った。いっぽうグルーディングはバラグラフ〔D市南岸、大運河に近いロウア・ペンブルック・ストリートで声楽を教えていた実在の人物、アーサ・B・〔訳〕〕の発声について話し、いっぽうトム・カーナンは一種の回顧的な順序〔トム・カーナンの口癖〕で話をもとにもどして、即興曲を弾きながら相手の話に耳を傾け、弾きながらうなずいているカウリじいさんに話しかけていた。いっぽうふとっちょの〔1—182参照〕ベン・ドラドは、パイプ〔1—190〕に火をつけてぷかぷかやりながらうなずき、またぷかぷかやっているサイモン・ディーダラスと話をしていた。

「去りゆきし君」〔89〕。すべての歌がこれをテーマにしている。ブルームはなおいっそうひもをひっ張った。どうも冷酷なものらしい。人間をたがいに夢中にさせ、しきりに唆す。そうしておいて、今度は無理矢理にふたりをひき裂くのだ。死。爆発事件〔ニューヨーク港での定期船の爆破事故。第八挿話参照〕。頭上の一撃。とっとと失せやがれ、というわけで。これが人生だ。ディグナム〔その埋葬が今朝行なわれた。第六挿話参照〕。うわっ、あの鼠ののたうつ尻尾〔同上〕！　僕は五シリング寄付しておいた。死体（コルプス）*、「楽園（パラディースム）」。畑（はた）くいなのようなしわがれ声の神父〔同上〕、毒を盛られた仔犬みたいな腹〔同上〕。死んでしまった。みなが聖歌をうたう。忘れられて。僕はきっと。そしていつか彼女と男たちも。彼女も捨てられる日がくる、いや気がさして。そうなると懐悩の日び。ひと知れずすすり泣く。つぶらなスペイン娘みたいな眼〔89〕もうつろで生気がない。彼女の波うつうつふさふさふさふさした髪ももつれ、た、まま。

そうはいっても、あんまり幸福じゃかえって退屈する。彼はさらに、さらにひっ張った。「あなたは〔おうち〕でしあわせじゃないのね」〔1—174〕？　びーん。ひもがとつぜん切れた。

チャリン、チャリン〔86〕とドーセット・ストリート〔オーモンド河岸通りから西に、ケイベル・ストリートを北上したところにある、南（アベ）から北（ロウア）へのびる長い通り〔訳〕〕へ。

ミス・ダウス〔90〕は相手をなじるような、だが同時にうれしそうな素振りでサテンの腕〔1—177〕をひっ込めた。

——そんなに馴れなれしくしないで、と彼女はいった、お近づきになることはまずないでしょうから。

ジョージ・リドウェル〔90〕は心そこ、心から、と彼女にいった、が、彼女は信じなかった〔1—160参照〕。

第一の紳士〔90〕はマイナ〔同上〕にうそじゃないよ、といった。彼女は彼にほんとうにうそじゃないのですね、と念をおした。すると第二のジョッキ氏〔同上参照〕がうそじゃない、と云った。うそじゃないことは請けあいだ、と。

ミス・ダウス、ミス・リディア〔90〕は信じていなかった、ミス・ケネディ〔同上〕、マイナは信じていなかった、ジョージ・リドウェルもやはり、ミス・ダウはなかった。第一の、第一の、ジョッキを手にもった紳士、信じて、やはり、やはり、いなかった、ミス・ケネ、リドリディ〔1—160〕アウェル、ジョッキ。

ここで書いたほうがいい〔87参照〕。郵便局の鵞（が）ペンは頭が噛られて、いびつになっている。

禿頭のパット〔85〕が合図を見て近くへやってきた。ペンとインキ。彼は立ち去った。それに吸取りも。彼は立ち去った。吸取紙だよ。いかにも聞えましたといわんばかりに、つんぼのパット〔同上参照〕。

——なるほど、とミスタ・ブルームは巻いた輪ゴムのはしをいじくりまわしながら云った。たしかにその通りですね。まあ二、三行で充分だ。ぼくのプレゼント〔87〕。ああいったイタリア風の華美な曲はみな。だれがあれを作曲したんだろう？　名前がわかればもっと理解も深まる。便箋一枚と封筒一枚〔1—174参照〕とをとり出せ、さりげなく。そうしないと変に思われるから。

――オペラ全体でこれほどすばらしい曲（ナンバー）はないよ、とグールディング〔90〕は云った。

――そうですね、とブルームはいった。

すべてが数（ナンバー）だ。考えてみればどんな音楽にもいえることだ。二の二倍を半分にすると一の二倍。振動〔92〕、和声といったってけっきょくは振動だ。一プラス二プラス六は七。数字をあやつってなんでも思う通りのことをする。そうなるとどんなものでも等しいことになってしまう。墓地（ミミリ）の塀のかげで均斉（シミトリ）〔正字法の問題の断片〔訳〕。第七挿話参照〕。この男は僕が喪服をきているのに気づいていない。無感覚、食べるのに夢中だからだ。ミューズの司る音楽数学。だからみな天界〔89〕の音楽を聞いているような気になるのだ。だけど、歌詞をマーサ〔87〕、九かける七マイナス・エックスは三万五千というようにすると、何もかもぶちこわしだ。けっきょく音のせいだ、それは。

たとえば、いま弾いている。即興的〔92参照〕。歌詞を聞くまではどのようにでもとれる。耳をすまして聴く必要がある。むつかしいものだ。最初はうまくゆく、だが、やがて和音が乱れがちになる、すると狼狽しはじめる。まるで麻袋をくぐり抜け、樽を跳びこえ、鉄条網を通りぬけて走る障害物競争みたいだ。曲のよし悪しはその場その場の状況による。そのときの気分の問題。だが、聞くのはいつも楽しいものだ。もっとも、音階を上下するだけの、娘たちがよく練習しているようなのはごめんだが。すぐ隣りで同時にふたりが。ミリ〔Bの娘〕は音痴とくる。妙なものだ、なにしろ僕たち夫婦はふたりとも。『花の歌（*ブルーメン・リード）』の楽譜を彼女に買ってやった。題名が気にいったので。ある晩、僕が家に帰る途中で、ひとりの少女がゆっくりピアノを弾いていた、その少女が。シシリア（*）・ストリートの厩舎の戸口。ああいった練習用に音のしない、形だけのピアノをつくるべきだ。

禿頭のつんぼのパットが、ごくありふれた吸取紙とインクとを持ってきた。パットはインクとペンといっしょに、ごくありふれた吸取紙を置いた。パットは皿、大皿、ナイフ、フォークをさげた〔1―159参照〕。パットは立ち去った。

音楽こそは最高の言語だよ、とミスタ・ディーダラスはベン〔92〕にむかって云った。彼は子供のころリンガベラ〔Irの、最南部共和國第二の都市コークの港口にある地名〔訳〕〕、クロスヘイヴン〔上述の地名のすぐ北の、海水浴場として有名な漁村〔訳〕〕、リンガベラで水夫たちが船歌をうたっているのを聞いたことがある。クイーンズ・タウン港〔現在のコウヴ港、コーク港の一部。Ir南岸の主要な海港、大西洋航路の寄港地〔訳〕〕はイタリアの船でいっぱいだった。奴らは、なあ、ベン、月夜に例の大げさな船頭帽をかぶって散歩していたんだ。みんなの声がみごとに調和して。いやまったく、ベン、あのすばらしい歌ったら。子供のころ聞いた。クロス、リンガベラ、ヘイヴンの月夜の船歌。

にがくなったパイプ〔1—190〕を口から離して、彼は蓋をするみたいに片手を口のわきにそえた、そして月光の降りそそぐ夜の鳩の声を、近くからはっきりと、遠くからの鳴き声はそれに応えて、くうくうと〔1—159参照〕。

バトン状にまいた『フリーマン』紙の端を上から下へブルームの、あんたの目は藪にらみ〔1—166〕がたどった、どこに書いてあったっけと走り読みしながら。キャラン、コウルマン、ディグナム〔第六挿話の、新聞の死亡広告欄の名前〕、パトリック〔ディグナムの息子の名〔注〕〕。ヘイホウ！　ヘイホウ！〔第五挿話終末の鐘の音〕フォーセット〔上述の死亡広告欄の名前のつづき〕。ヘヘ！　これで新聞を読んでるように見えただろう。

この男が鼠みたいにずるがしこく、盗み見していなければいいんだが。彼は『フリーマン』紙を顔のまえに拡げた。これで見えやしない。*ギリシア文字のイー〔つまりエプシロン〕を書くことを忘れないように。ブルームはペンをインクに浸した、ブルームはつぶや、拝啓。ヘンリさま〔マーサーの手紙の出だし〔訳〕〕が書いた、親愛なるマディ〔マーサの愛称〔訳〕〕。あなたの手〔紙〕とは〔な〕〔1—174〕を受けとりました。ありゃ、僕はいれたかな？　どこかのポケ〔ット〕に。とうて〔い〕今日は。とうていに傍点をうて。手紙が書けそうもありません。

まったくうんざりだ。うんざりしたブルームは、僕は思案中だといわんばかりに、パット〔93〕が持ってきたありふれた吸取紙をタンバリンよろしく指で軽くたたいた。

さ、つづけて。僕がいおうとしていることはお判りでしょう。いや、このイーを書きかえよう。とるに足りないささ額で

はありますが同〔封〕のぼくのプレ〔93〕をお受けとりください〔87参照〕。彼女に返無用といってやろう。まてよ。ディグに五シリング〔92〕。ここが約二シリング。鷗に一ペニー〔餌代。第八挿話参照〕。「エリアは来ま」〔伝導のびらの文句。同上〕。デイヴィ・バーンの店〔デューク・ストリート二一号。葡萄酒、酒類商デイヴィド・B・経営。バートン食堂〔1—188〕の割注参照〔訳〕〕で七ペンス〔食事代。同上〕。しめて約八シリングだ。半クラウンならどうだろう。とるに足りないささやかな額ではありますが、ぼくのプレ、二シリング六ペンス〔半クラウン〕の郵便為替。「長い手紙を」〔マーサの手紙の一部〕。ぼくを軽蔑しますか？　チャリン、チャリン〔92〕、いうことをきかないのかい〔1—159、186〕？　だいぶ興奮してきたぞ。なぜあなたはぼくのことをいじわるなんて書くのですか〔87参照〕？　あなただっていじわるじゃないですか？　「あ*ら、メアリがピンをおっことした」。今日はこれでさようなら。ええ、ええ、きっとあなたにお知らせしますよ。「知って」〔マーサの手紙の一部〕。「こいつがずり落ちたらどうしよう」。ぼくを呼ぶのにあのほかの。来世なんて書いてあった〔マーサーがもうひとつの言葉（ワード）をもうひとつの世界（ワールド）＝来世と書き違えた。〔訳〕〕。「あたしがまんしきれなく」〔同上〕。「ずり落ちたらどうしよう」。ぼくの言葉を信じなきゃ。信じなさいよ。ジョッキ〔93〕。それは。ほんとう。だよ。

手紙を書くなんて、ばかげてやしないか？　世の亭主族はこんなことはしない。それは結婚の結果だ、妻君がいるから。僕の場合はマーサと離れているからだ。もしも。だが、どうやって？　モリはきっと。若さを保つのに。もしも彼女に感づかれたら。僕の高級帽にはさんである私書カード〔第五挿話参照〕。いや、なにもかもうち明ける必要はない。無用な悲しみを与えるだけだ。もし女たちにさとられないなら。女の性（さが）〔1—192〕。楽*しみに女なし男なし。

ド*ニブルック村、ハーモニ通り一号のバ*ートン・ジェイムズを御者とする貸馬車三百二十四号に、ひとりの若い、いかにも紳士らしい客がのっていた、イードン河岸通り〔D市北岸、オウコヌル・ストリートの南端を左折（東へ）したところ〔訳〕〕五号の洋服裁断、仕立て商ジョージ・ロバート・ミージァス製のインジゴ色のサージ服をりゅうと着こなし、グレイト・ブランズウィック・ストリート〔D市南岸、オウコヌル橋を渡って、南東にのびる、現在のピアス・ストリート〔訳〕〕一号の帽子製造業ジョン・プラストウで買ったとてもしゃれた麦藁帽子〔1—176〕をかぶって。えっ？　こ

れはがたがたゆれながら〔90参照〕、チャリン、チャリン〔93〕と進んでいった二輪馬車だ。ドラガッツ豚肉店〔アバ・ドーセット・ストリート(93参照)。五五号Aのマイクル・ブラントン経営の店？〕のアゲンダート・キブツのつやつやした数珠つなぎのソーセージのまえを牝馬〔90〕の優美な臀部〔1—186参照〕が跑足で〔90〕通りすぎた。

——広告の返事を書いているのかい？　とリッチ〔同上〕が探るような目つきでブルームに訊ねた。

——ええ、とミスタ・ブルームはいった。市内セールスマンの募集のことで。まずだめだと思いますが。

ブルームはつぶや〔95〕、以前の会社の推薦状あり。だが、ヘンリ〔同上〕は書いた、そう呼んでくだされば すごく興奮しますよ。どうしたらいいかおわかりですね。さ、いそいで。ヘンリ。ギリシャ文字のイー〔同上〕だ。追伸〔1—159〕を書きそえたほうがいい。いまなにを弾いているのだろう？　即興的〔94〕に。幕間演奏だ。追伸。例のラム　タム　タム。どんな罰を？　ほんとうにぼくを痛いめにあわせるというのですか〔第五挿話のマーサの手紙参照〕？　ねじれまがってゆれるスカート、ばたん。「教えてね、あたし知って」。「おきたいの」〔同上〕。おお。もちろんそうでなけりゃ頼んだりはしませんよ。ラ　ラ　ラ　リー。こんな風に短調の哀感にみちた楽句がおわる。なぜ短調は哀感をそそるのだろう？　エイチと署名するんだ。ご婦人がたは手紙の末尾に哀感が流れているのをお好みだ。三伸。ラ　ラ　ラ　リー。今日はとってもの哀しい〔1—159〕。ラ　リー。とてもさびしい〔同上〕のです。ディー。

彼はパットが持ってきた吸取紙〔94〕で手ばやくインクを吸いとった。さ、封〔93参照〕。宛名。さも新聞から写しとるみたいに。つぶやいた。キャラン&コウルマン〔95〕有限会社〔死亡広告欄の死亡者名でつくった架空の会社〕。ヘンリは書いた。

ダブリン市
*ドルフィンズバーン通り

郵便局留め

マーサ・クリフォード様

この男が見てもわからないように、一度つかったところで吸い取ろう。さあ。これでよし。例の懸賞小品〔第四挿話参照〕むきのアイディア。探偵が吸取紙の文字から鍵をつかむ。一段につき一ギニの割で賞金〔同上〕。「マッチャムはときどきあの嘲笑的な妖婦を思い起す」〔同上〕。気の毒なミセズ・ピュアフォイ〔Bが『マッチャムの大手がら』の作者フィリップ・ボーフォイとマイナ・ピュアフォイとを混同したことからの連想。第八挿話参照〕。U・P・、破滅〔デニス・ブリーンへの〕〔いたずらの手紙の文句〕。

もの哀しいって書いたくだりはやや詩的にすぎやしないかな。みな音楽のせいだ。「音楽に不思議な力あり」。シェイクスピアいわく。三百六十五日、その日その日にふさわしい金言がある〔格言つきのカレンダーなどへの連想〕。「生、それとも死」〔『ハムレット』3、1の五六行〕。すぐさま得られる知恵。

フェタ通りのジェラードの薔薇園のなかを白髪まじりの赤茶色の髪をした彼が歩いている。人生は一回こっきり。肉体もただひとつだ。やれ、何が何でもやれ。

とにかくやったぞ。郵便為替〔96〕、切手。ちょっと行ったところに郵便局がある〔現在地から東に、ケイベル・ストリートに入り、西側を北上してメアリズ・アビ通りと交わる角から七軒目〕〔訳〕。さあ、あそこまで歩こう。ここはもういいや。バーニ・カーナン〔D市北岸、ケイベル・ストリートから西に入るリトル・ブリテン・ストリート八―一〇号で居酒屋を営むバーナド・K・〕〔訳〕の店でみなに会う約束がある。あんな商売はいやだ。つぎはあの忌中の家〔ディグナム家〕へ。歩こう。パット！　聞こえない。かなつんぼ〔93参照〕だからな。

馬車〔96〕がもうじきあそこに着く。さあ、話すんだ。パット！　だめだ。ナプキンを用意している。一日のうちにはずいぶん歩くんだろうな。禿頭のうしろに顔を画けば、パットがふたりいることになる〔猫の手も借りたいようないそがしい様子を茶化して〕〔訳〕。もっと歌って

くれるといいのに。よけいなことを考えなくてもすむから。

気づかい顔〔1—181〕をした禿頭のパット〔93〕がナプキンを司教冠の形にたたんでいた〔1—188参照〕。パットは耳の遠い給仕〔85〕だ。パットは客が待っているあいだじっと待っている給仕だ〔88参照〕。エ、へ、へ、へ、へ。彼は客が待っているあいだじっと待っている。へ、へ。給仕だ、彼は。へ、へ、へ、へ。彼は客が待っているあいだじっと待っている。客が待っているあいだ、もし客が待っていたら、客が待っているあいだは彼がじっと待っているだろう。へ、へ、へ、へ。ほお。客は待っているあいだはじっと待っているんだ〔言葉遊びとして導き出された意外な結果〔訳〕〕〔1—160〕。

いまやダウスは。ダウス・リディア〔93〕は。ブロンズ〔90〕と薔薇の花〔84〕。

彼女の休暇はすばらしかった、とってもすばらしかったわ〔1—168参照〕。それに、持ってかえったすてきな貝殻〔1—180〕をちょっと見てごらんなさいな。

バー〔88〕のはずれの彼のところへ、彼女は彼、事務弁護士ジョージ・リドウェル〔93〕に聞いてもらおうと、いっぱい棘のある〔1—180〕、螺旋状にまいたささえ〔1—159参照〕を軽快な足どりでもってきた。

——聞いてみて〔1—159〕！　と彼女は男にいった。

トム・カーナン〔91〕が吐きかけるジンでぬくもった言葉に耳を傾けながら、伴奏者〔92参照〕はゆっくり音楽を織りあげていた。ぜったいに間違いのないことなんです。ウォルタ・バプティ*がどうして歌をうたえなくなったか。そうですとも、女の亭主が彼の喉をしめあげたからですよ。「悪党め」、と奴はいったんです、「二度と恋歌なんかうたえないようにしてやる」。ほんとうなんですよ、僕がトムというのと同様に確かなんです。ボブ・カウリ〔92〕は織りつづけた。テナー歌手は女に〔86〕。カウリは背をのばして椅子にもたれ掛った。

とうとういま男には聞えた、彼女が貝殻を耳にあててくれて。さあ、聞くのよ！　彼には聞こえた。驚くべきことだ。今

度は彼女は自分の耳に押しあてた。と、そのとき板すだれをもれる光のなかを、対照的なくすんだゴールド〔90〕の頭がゆっくり近づいてきた。聞こうとして。

かつ。

ブルームはバーの開いたドアから、娘たちが貝殻を耳に押しあてるのを見ていた。彼は彼女たちひとりひとりが自分だけで聞き、つぎにひとりひとりが相手に聞かせた音をなおさらかすかではあるが聞いた、鳴りひびく波のざわめき、うちにこもった轟きを〔1—159参照〕。

ブロンズとうんざりしたゴールドとが並んで、近くで、あるいは遠くでふたりは耳をすました〔1—176参照〕。

あの娘の耳も貝だ〔英語では外耳のことを貝という〔訳〕〕、あそこに突きでた耳たぶ。海辺にいっていたんだ。「か*わいい浜の娘たち」。陽焼けしてひりひりする肌。小麦色にするのには、まずコールド・クリームを塗ればよかったのだ。トーストにバターをつける要領。ああそうだ、あの化粧水〔第五挿話でBがMのために注文して置いた〔訳〕〕を忘れないこと。娘の口もとに陽焼けの水ぶくれ。「おいらの頭はむしょうに」〔86〕。耳をかくして編みあげた髪〔1—167参照〕、海草にくるまった貝というところだ。なぜ娘たちは海草の髪の毛で耳をかくすのだろう？　そういえばトルコ人の女は口をかくすが、なぜだろう？　シーツのはしからわずかにモリの眼。二重面布（ヤシュマク）みたいに。入りかたを考えろ。洞窟みたいだ。無用の者立入り禁止。

みなは潮騒が聞こえると思っている。海の歌声。轟き。実際は血液だ。ときどき耳の中に波がうち寄せる。そう、それが海なのだ。血球の島じま。

まったく驚くべきことだ。実にはっきり聞こえる。もう一度。ジョージ・リドウェルは貝殻を近くに寄せて、さざめきにじっと聴きいり、それから用心深くそれをわきに置いた。

——『*あのたけり立つ波はなにを語りかけているのかい』？　と彼は娘の微笑にむかって訊ねた。

ただだまったまま、艶然と海洋のような微笑をうかべながらリディア〔99〕はリドウェルにほほえみかけた。

かつ、

ラリ・オウルァーク〔食糧雑貨、茶、葡萄酒、酒類商ロレンス・O・〕の店の前で、ラリ、やりてのラリ・オウの前でボイラン〔90〕はひと揺れして、ボイランは方角をかえた〔オウルァークの店はアバ・ドーセット・ストリートの北東のはずれの七四。号にあり、そこで左折すると問題のエックルズ・ストリートに出る〔訳〕〕。

貝殻をうっちゃって、ミス・マイナ〔93〕は所在なさそうなジョッキ氏〔同上参照〕のところへゆっくりもどっていった。どういたしまして、彼女は歌の文句のようには寂しくはなかったですよ、ということをいたずらっぽい表情で、ミス・ダウスはミスタ・リドウェルにさとらせた。月に照らされた、海岸での散歩。そうですとも、ひとりじゃなかったわ。だれといっしょだね？　彼女はつんとして答えた、仲のいい殿方とよ。

ボブ・カウリ〔99〕の指は高音部の鍵盤のうえをいそがしく走りまわりながら、ふたたび音楽を奏ではじめた。家主〔1—186〕のほうに優先〔権〕がある。ほんのちょっと。のっぽのジョン〔1—181参照〕。ふとっちょのベン〔92〕。彼は軽快なタッチで、軽快で快活なチン、チン〔1—182〕、躍動的なメロディーを演奏した、ふざけた微笑をうかべながら足取りかるくステップを踏む貴婦人たちと、その伊達な仲のいい殿方にふさわしい曲。アン。アン、アン、アン。ドゥ、アン、トロア、カトル。

海、風、木の葉、雷、川の流れ、もうと鳴く牛、家畜市場、雄鶏、雌鶏は雄鶏とは鳴き方がちがう。しゅーうと音を出す蛇。いたるところに音楽がある。ラトリッジ〔『イーヴニング・テレグラフ』紙の出納係〕のドアはイーときしる〔第七挿話参照〕。いや、あれは雑音だ。いま弾いているのは『ドン・ジョヴァンニ』のメヌエットだ。お屋敷の広間を飾るありとあらゆる華麗な夜会服が舞い踊っている。苛酷な時代。そとに小作人。すかんぽの葉っぱばかりを噛っている飢えた蒼い顔、顔。けっこうなことだ。見なせい、そら、そら、そら、そら、そら、あっしらを見てみなせい。

あの曲の楽しさは僕にもわかる。あんな曲はとても書けそうにないが。なぜだろう？　僕の感じる楽しさはまた別の楽し

さだ。だが、両方とも楽しさには違いない。そうだとも、あれこそが楽しさなのだ。音楽が生まれること自体心に楽しさがある証拠だ。よく彼女はむっつりしているように見えたが、そのうち陽気に歌を口ずさみはじめた。それでわかるのだ。

マッコイ〔彼の妻君もMと同様に歌手〔訳〕〕の旅行鞄。「僕*の女房と君の細君」。ぎゃあぎゃあ鳴く猫。絹をひき裂くような音。彼女が話すときの舌はふいごの舌のようだ。女は男ほどには音度差をこなせない。女は声にも穴がある。あそこをうめて。あたしは熱く、暗く、あいているわ。「*たれかあらん（クイス・エスト・ホモ）」を歌ったときのモリ、*メルカダンテの曲。よく聴こうと耳を壁にぴったりくっつけていたっけ。期待どおりにやれる女がいないものかな。

ぎしぎし、ジッグ踊りをして〔1—189〕、ぎしぎし走り、とまった。ハイカラなボイラン〔101〕のハイカラな赤靴〔90〕と空いろの縫い取りのついたソックスがいかにも軽やかに地面に降り立った。

おお、たしかに僕たちはすっかり！　室内楽。これをもじって言葉の遊びができそうだ。そういえば、あれも一種の音楽だとよく思ったものだ、彼女が〔1—160〕。あれは音響学だな。チン、チンという音。からの容器が音がいちばん大きい。それは音響学によるのだ、すなわち水の重量が落下する水の法則にひとしい場合に応じて反響が変化する。ちょうどジプシーの眼をしたハンガリー人リストの『狂詩曲』〔同上〕みたいだ〔小水の出かたとの比較〔訳〕〕。真珠〔同上〕。水滴。雨。ピタピタ、パタパタ、ポタポタ、シュウ〔同上参照〕。出そうか。出るかもな。さっきいったが〔第一〇挿話参照〔訳〕〕。

男がドアをとんとん叩いた、男がノックしてこつこつ叩いた、彼、ポール・ド・コック〔1—185〕が音たかく、自信にみちた棍棒で、*まらたかたか鷹の嘴で〔1—160参照〕ノックした。まらまら。

かつ。

——ベン、「*ここに怒りあり（クイ・ズデニヨ）」をやろうよ、とカウリじいさん〔92〕はいった。

——いや、ベン、とトム・カーナン〔同上〕が口を挾んでいった、『*若き五分刈り隊員』がいいよ。わがお国なまりとい

うところで。

——うん、ベン、それを歌ってくれ、とミスタ・ディーダラスはいった。「忠勇なるみなさん」ていうやつを。

——さ、ひとつ〔1—160〕やってくれよ、とみなは異口同音に懇望した。

さあ、出よう。こっちだ、パット〔98〕、廻れ右。前へ。あっ、やって来た、とうとうやって来た、だがゆき過ぎた。こっちだよ。おいくら?

——なに調だい? シャープ六つかい?

——嬰ヘ長調だ、とベン・ドラドがいった。

ボブ・カウリのぐっとのばした鷲の爪がずしんと響く〔1—160〕低音部の和音の黒鍵〔同上〕に摑みかかった。

いかなきゃなりませんので、王族〔1—190〕ブルームはリッチ〔97〕王族にいった。まあ、まあ、とリッチはいった。いや、どうしても。どこかで金を手に入れたんだ。この男は思いきり飲みさわいで腰の痛み〔1—191参照〕など吹っ飛ばそうという心算だ。おいくら? パットは視話を視聴する。一シリング九ペンスです。一ペンスは取っておきたまえ。さあ。チップに二ペンスやろうか。つんぼ〔93〕ゆえの気づかい顔〔99〕。だが、たぶん、家では妻君と子供たちがパティの帰りを待ちに待っている。へ、へ、へ。つんぼは客が待っているあいだじっと待っている〔同上参照〕。

だが待て〔1—160〕。だが聴け。暗い和音の連続。ちんんんつうな。腹にひびく音。地球の暗い中心の洞窟で。深く埋蔵された鉱石〔同上〕。感動の音楽。

暗い時代の、怨念のこもった、倦みつかれた地球の重苦しい声がうめくように聞こえてきた、それも遠くから、雪をいただいた山やまから悲しげに響き、「忠勇なるみなさん」に呼びかけた。彼は神父をさがしていたのだ。神父に「ひとことお話しがあった」ので。

かつ。

ベン・ドラドの声。低音の樽声〔1—188〕。彼は彼なりに声を最大限に生かす。はてしなく拡がるひと気のない、月の照らさない、おん〔な〕月のない沼沢地にひびく蛙のがあがあ声。またしても失敗。彼はもとは手広く船具商をやっていたのだ。おっと想い出した、防水ロープと位置標示用カンテラ。破産して、大枚一万ポンドもの負債。いまはアイヴァ・ホーム*にいる。小屋みたいなナンバーなになにの部屋。最高級（ナンバー・ワン）バス・ビール〔イギリス、スタフォードシャ郡のバートン・オン・トレント市、ラトクリフ&グレトン・バス醸造会社製のビール。オウコヌル・ストリートに代理店がある〔訳〕〕がけっきょく彼の命取りになった。

「神父はご在宅です」。にせ神父の召使が彼を快く迎えいれる。司祭館にはいる。「敬愛する神父」。何度もお辞儀して、裏切りの召使が。ひとしきり装飾和音。

連中を零落させる。一生を台なしにする。そしておいて、死に場所に小屋みたいな部屋をひとつずつあてがう。しーっ。ねんねんよう。ころりと死ぬんだ、わんわん。わんちゃんはもう死ね。

警告の、ものものしい警告の声がみなに「若者」がひと気のない「内陣にはいった」ことを教えた、みなに彼の足音がそこでいとものものしく響いたことを教えた、みなに「長黒衣を着た神父」が告解の聴聞にそなえて坐っている「陰気な部屋」のことを教えた。

ひとのいい男。いまではちょっと耄碌（もうろく）している。そのうち『アンサーズ*』の詩人の絵パズルで、いっちょう当ててやろうと思っている。一等賞には手の切れるような五ポンド紙幣を差しあげます。巣ごもった雛をかえしている鳥。彼の答えは『最後の吟遊詩人の歌*』。C□Tはなんていうペットでしょうか？　T□R、もっとも勇気のある船乗り。彼の声はまだ堂々としている。まだ宦官〔1—188〕みたいなことはない、お道具〔同上〕がみんな健在のおかげだ。

さあ、耳をすまして聴くんだ。ブルームはじっと耳をすました。リッチ・グールディング〔94〕は耳をすました。そして

ドアのそばでつんぼのパット〔93〕、禿頭のパット、チップをもらったパットが耳をすました。和音の流れがぽろんぽろんとゆるやかになった。

痛悔と痛恨の声がゆるやかに流れてきた、飾られ、うち震えて。ベンの顎ひげ〔1—187〕が深く悔いて告白した、「主の御名(ミナ)に〔1—160参照〕よりて(ドミニ)」、神の御名(み)によりて若者は「ひざまずいた」。彼は手で「胸をうち」ながら告白した、「わが過(メーア・クルパ)ちなり」。

またラテン語。あれで信者を鳥もちみたいにくっつけて置くのだ。あの女たちに聖体(コルプス)〔92参照〕を与えていた司祭〔第五挿話のミサの場面参照〕。葬儀小聖堂〔第六挿話の墓地の場面参照〕のあのひと、柩(コフィン)だか、コフィだか〔同上〕、死体(コルプス)〔92〕御名(ノミネ)。あの鼠〔同上〕の奴いまどこまでやったかな。がりがりひっ掻く。

かつ。

みなは耳をすました。ふたりのジョッキ氏〔101参照〕とミス・ケネディ〔93〕、ジョージ・リドウェル〔99〕、表情ゆたかな瞼の動き、盛りあがったサテン〔93〕の胸〔1—177参照〕、カーナン〔99〕、サイ〔91〕。

嘆きにみちた声が喘ぎ喘ぎ歌った。「自分の罪を」。「復活祭いらい」彼は「三度呪いました」。この罰当りめ〔1—173参照〕。それに「一度はミサの時間に」彼は「遊びにでかけました」。一度は「墓地のそばを通りかかりながら」、彼は「お袋さんの冥福を祈」らなかった。まだ子供だ。若き五分刈り隊員〔102〕。

ブロンズ〔100〕は聞き耳をたてながら、ビールポンプの前で〔1—185〕ずっと遠くの方を見やっていた。神妙な顔つき。この僕の視線をちゃんと意識している。モリもひとの視線を感じとることにかけては天下一品だ。

ブロンズは流し目に遠くを見すえた。あそこの鏡〔1—180〕だ。あれが彼女の顔のいちばんいい角度かな？　女はみな心得ている。ドアにノックの音。おめかしに最後のひと刷毛〔86参照〕。

まらたかたか鷹〔102〕。

女たちは音楽をきくときどんなことを考えるのだろう？　がらがら蛇を捕まえる法〔音楽によるインド式蛇操縦法への連想〕。あの晩、マ*イクル・ガンが僕たち夫婦をボックス席に招待してくれた〔1—189参照〕。楽器の調子を合わせていた。ペルシャ国王がいちばんお気に入りだったひと齣。『な*つかしきわが家』の音楽への思いを掻き立てられて。それにカーテンで洟をかんでおられたそうだ。お国の習慣なのだろう。あの音合わせも音楽だ。ふつう考えられるほどはひどい雑音じゃない。ぴゅうぴゅう。金管楽器は鼻を空にむけてひんひんいななく驢馬だ。コントラバスは自由がきかず、左右の脇腹に深傷をおった男。木管楽器はもーと鳴く牛。セミ・グランドピアノは大きく口をあけた鰐、音楽に顎あり〔「音楽に不思議な力あり」(98)のパロディ〔訳〕〕というところだ。そういえば木管楽器はグッドウィン〔1—183〕と名前がにている。

彼女は美しかった。サフラン色のドレスを着ていた、襟もとがロー・カットで、お道具がまる見え〔1—188〕。劇場で、身をかがめてなにか訊ねたとき、彼女のはく息は丁子の香りがした。僕は亡くなった父さんの蔵書のなかで、スピ*ノザがどんなことを云っているか話してやった。催眠術にかかったみたいに、おとなしく聞いていた。あんなに大きく見ひらいていた眼。彼女は身をかがめた。二階正面の特別席の男がオペラグラスで、穴があくほど彼女の胸もとを覗きこんでいたっけ。曲のよさは二度きかないとわからない。風景と女はちょっと見ただけでわかるが。神*は国土をつくり、人間は歌をつくった。尖ったホースの彼に会った〔1—185〕。これが哲学。あら、いやだ〔今朝のMのせりふ。第四挿話参照〕。

全員が死んだ。全員が斃れた〔1—160〕。「ロスの包囲で」彼の「父は斃れ」、「ゴ*ーリで」彼の「兄たち」ぜんぶを失った。「ウェックスフォードへ」、「お*いらはウェックスフォードの若者」だから、彼はおもむくつもり。「家名と一門」さいごの生き残り。

この僕も。一門の最後。ミリ〔94〕は若い学生と。まあ、どうやら僕の責任だ。息子がいないなんて。ルーディ〔Bの死んだひとり

息子〕。もうおそすぎる。だが、もしもそうでなかったら？　そうでなかったら？　ひょっとしてまだ？

彼は「怨みをいだかな」かった。

怨み。愛。けっきょくは名称のちがい。ルーディ。そろそろこっちも老人だ。

ふとっちょのベン〔101〕が声を思いきり張り挙げた。たいした声量だ、とリッチ・グルーディング〔104〕は、蒼白いに赤みをみせはじめ〔91〕てブルームにむかっていった、そろそろ老人だ。だが、いつ若かったか？

いよいよアイルランドのお出まし。「国王よりもわが祖国を」。彼女〔ブロンズのミス・ダウス〔訳〕〕は聞きいっている。『*だれか一九〇四年を語るをおそれよう？』。逃げだすチャンス。もう見あきたからな。

――「神父さま、祝福してください」と、五分刈り隊員〔105〕のドラドが叫んだ。「祝福して、おもむかせてください」。

かっ。

ブルームは祝福されない〔ユダヤ人だから〔訳〕〕ままに、出ようと眼をくばった。男を悩殺するためにべたべためかす、週十八シリングでは足りない。金づるに困らない。だからこっちでも、いつも用心が肝心。「あの娘たち、あのかわいい」〔100参照〕。『*もの悲しき波のほとりに立ちて』。コーラス・ガールのロマンス。婚約不履行の証拠として手紙が読みあげられる。ひょっこちゃんのおんどりどんちゃんより。法廷に起る笑いのうず。ヘンリ〔97〕。この手紙の署名は私のじゃありません。あなたのすてきなお名前〔87〕。

音楽はささやきに変った。曲も歌詞も。それから早まった。にせ「神父」は「衣ずれの音」とともに「長黒衣」を脱ぎすて、軍人に。「義勇騎兵隊長」。みなはそらで憶えている。もっぱらわくわくする興奮を期待しているのだ。「義勇騎兵隊」。

かっ。かっ。

わくわくする興奮をおぼえながら彼女は聴きいっていた、感動のあまり、もっとよく聴こうと身をのり出して。

放心した顔。まだヴァージンらしい、それとも、指でペッティングぐらいは。なにか書きつけなくちゃ、なにしろ白紙なんだから。さもないと、女ってどうなるのだろう？　痩せ衰え、絶望する。だが、それがかえって若さを保つ。自分でほれぼれするほど。まあ。ちょっと鳴らしてみよう。唇で吹いてみよう。女の白い体は生きたフルートだ。やさしく吹くんだ。つぎに強く。女にはみんな穴が三つある。あの女神〔1―166〕にはなかったが。女はそうしてもらいたがっているのだ。控え目なのもほどほどにしないと。だから彼〔ボイラン〕は女に不自由しない〔86参照〕。ふところには金貨、顔はあくまでも鉄面皮。さあ、なにか云うんだ。こっちに耳を傾けさせるんだ。眼と眼をみあわせて。『無言歌*』。モリとあの手回しオルガン弾きの少年〔イギリスではイタリア移民がふつう〔訳〕〕。彼女は少年が、飼っている猿が病気だといっているのがわかった。いや、それとも、イタリア語はとてもスペイン語に似ているからかな〔1―185参照〕。女は動物のこともあんな風にわかるんだ。ソロモン*もそうだった、もって生まれた才能。

腹話術みたいなもの。口は閉じたまま。腹の中で考える。ええっ？

どう？　あんたと？　ぼく。とても。きみ。いたそうか。

隊長は烈火のごとく「怒って、語気あらく呪いの言葉」を発した、卒中でたおれんばかりに激昂して、この罰当りめ〔105〕。「小僧、のこのこ出掛けてくるとは殊勝な考え」。「もう一時間のいのちだ」、それでお陀仏。

かつ。かつ。

興奮の一瞬。みなはこみ上げてくるものを感じている。あえて死を願い、それを切望する殉国者のためにそっと涙をぬぐう。すべての死にゆく者どものために、すべての生まれてくる者どものために。気の毒なミセズ・ピュアフォイ〔98〕。もう終っていればいいが〔彼女は第一四挿話で男児を出産する〔訳〕〕。なにしろ女性の子宮は。

子宮のしずく、女性の涙にぬれた眼球が、まつ毛の垣根のしたから一点を見つめていた、しっとりと、じっと聞きいっ

て。彼女がおしゃべりをしていないときの目のほんとうの美しさを見てみるがいい。「あそこの川に」。ゆっくり波うつサテン〔105〕の乳房が起伏するたびに（「彼女の波うつ乳」〔前出のボルノ小説の文句〕）、赤い薔薇の花〔99〕がゆっくりもち上っては沈んだ、赤い薔薇。心臓の鼓動、彼女の呼吸、呼吸こそ生命だ。そしてか細い、か細い羊歯の葉先がみなうち震えた、乙女の髪の毛の〔1—160参照〕。

だが見ろ。「星影は消えゆきて」〔1—175〕。おお、『薔薇』よ！『カスティールの』〔同上〕。「夜はしらじらと」〔同上〕。ありゃ。リドウェル〔105〕。じゃ、お目あては彼で、僕では。血ばしった眼。僕はあんな女が好きなのか？　ここからは彼女がよく見える。ポンと抜いた王冠栓〔1—175〕、飛び散った麦酒の泡、あき瓶の山また山。

突き出た、つるつるしたビール・ポンプ〔105〕の把手にリディア〔101〕は軽く、ぽってりした手をかけた、あたしの手に任せて、と。五分刈り隊員〔107〕を哀れむあまり、まったくのうわの空で。うえに、したに、うえに、ぴかぴか磨かれた把手をにぎった親指とひとさし指とが（彼女は彼の視線、僕の視線、相棒の視線を意識している）上にしたに、哀れみに沈んで、上にしたに、手を休める、それからやさしいタッチで、なめらかに、ゆっくりと撫でおろした、つめたく堅い、ぴかぴかした白い棒の頭が、上下する二本の指の輪から突き出していた〔1—160参照〕。

まらと、たかと〔102参照〕。

かつ。かつ。かつ。

わしがこの「家を管理している」。「アーメン」。彼は逆上して歯ぎしりした〔1—160〕。「裏切りものは縛り首になるがいい」。連続的な和音があきらめの調べをかなでた。まったく悲しい話だ。だが、どうしようもなかった。

曲が終わらないうちに出よう。ありがとうよ、とてもすばらしかった。帽子をどこに置いたかな？　彼女のわきを通っていこう。あの『フリーマン』紙〔95〕は持っていかなくてもよい。手紙はちゃんとある。もしも彼女がその？　よそう。歩

き、歩き、歩くんだ〔98参照〕。キャシェル・ボイロ・コノーロ・コイロ・ティズドル・モリス・まだおわりじゃない（ティズンドル）・ファレル〔キャシェル・ボイル・オゥコナ・フィッツモリス・ティズドル・ファレルという長い名前の変人〕みたいに〔中市内を彼はほとんど一日中歩きまわっている〔訳〕〕。あああああああるくんだ。

さあ、わたしはもう。行くのかね？　*いかねわもえ。ブルムたがった。ひょろ長い、青いライ麦〔1—170参照〕よりも高く。おや。ブルームは立ちあがった。尻の石鹸〔午前中に買い、持ち歩いている。第五挿話参照〔訳〕〕がどうやらねばねばするようだ。きっと汗をかいたんだ、音楽のせいで。あの化粧水〔100〕、忘れるな。じゃ、また。高級。中に挟んである私書カード〔96〕。たしかに。

耳をすまして戸口に立っているつんぼのパット〔105〕のそばを、ブルームは歩いていった。

「*ジニーヴァ兵舎であの若者は死んだ」。「パシッジに彼の遺骸は葬ら」れた。悲しみ（ドロール）〔89参照〕！。ああ、彼はドロウリスを！　歌い手の悲痛な声が哀悼の祈り（カディッシュ）をさそった〔Bのユダヤ人としての育ちの表われ。ユダヤ教の葬式の思い出〔訳〕〕。

薔薇のわきを、サテンの乳房〔1—158〕のわきを、愛撫している手のわきを、汚水のわきを、あき瓶のわきを、ポンと抜いた王冠栓のわきを、通りぎわに別れの言葉をかけて、ひとびとの視線と乙女の髪の毛〔109〕を、ブロンズと深海の薄暗がり〔1—183参照〕で色のあせたゴールドとをあとに、ブルームは出ていった、気のやさしいブルーム、とてもさびしいのです〔97〕のブルームが。

かつ。かつ。かつ。

若者のために祈ってください、とドラドのバス声〔1—181〕が祈った。こうやって歌を聞いておいでの「幸福な」みなさん。「祈りをとなえ、涙を」流せ、善男、「善民よ」〔1—160〕。彼は「若き五分刈り隊員」なりき。

立ち聞きしていた雑役ボーイ〔1—163〕、五分刈りの若き雑役ボーイをびっくりさせて、オーモンド・ホテル〔1—177〕の玄関のホールまでやってきたブルームは、どよめき、うなるブラボーの声、手で背中をばんばん叩く音、みなが靴——靴であって、靴みがきもする雑役でもボーイでもない——をどんどん踏み鳴らす音を聞いた。全員による喝采の声、あとは思い

きり飲んで手打ち式。うまく抜け出してきたものだ。

――さあ、やれよ、ベン、とサイモン・ディーダラスはいった。いやあ、相変らずうまいもんだ。

――うまいのなんのって、とトムジン〔99参照〕・カーナンはいった。あのバラードの歌唱ではもっとも刺激的な〔92の「一種の回顧的順序」と同様にトム・カーナンの口癖。第六挿話参照〔訳〕〕ものです、天地神明に誓ってうそじゃありません。

――まさにラブラッシュ*だ、とカウリじいさん〔102〕はいった。

だぶたぶ〔1―183〕のベン・ドラドは賛辞にえらく満足し、満面紅潮して、カチューチャ踊り〔四分の三拍子の快活なスペイン舞踊。通例カスタネットを使う〔訳〕〕の足どりで、のそりのそりとバー〔99〕にむかって巨体を運んだ、中風やみみたいな不恰好な〔1―182〕指を高くあげて、ぱちぱちカスタネットよろしく鳴らしながら〔1―160〕。

ふとっちょのベナベン・ドラド。ふとっちょのベンベン。ふとっちょのベンベン〔同上〕。

ルルル。

そしてだれもみなひどく感激して、サイモンは鼻の霧笛でさめやらぬ憐憫の情を吹き鳴らしていたが、みな大声で笑いながら、彼らは彼、ベン・ドラドをとり巻いて、巧みにおだてあげおだてあげ連れていった。

――とても血色がいいですね、とジョージ・リドウェル〔105〕はいった。

ミス・ダウスは客にそなえて胸の薔薇の花〔109〕を直した。

――おいらのベン*ようよ、とミスタ・ディーダラスはいった、ぶ厚い背中の肩甲骨のあたりをぽんと叩きながら。奴はぴん*ぴんしているが、全身に多量の脂肪組織を匿っているのが気がかり。

ルルルルルルルススス。

――サイモン、致命的な脂肪だよ、とベン・ドラドは唸った。

リッチ〔107〕は疎遠のきざし〔91〕として、あとにひとりぽつねんと坐っていた、グールディング・コリス・ウォード法律事務所〔1—179〕だなんて。どうしようかと、彼は待っていた。パットもお勘定を。

かつ。かつ。かつ。かつ。

ミス・マイナ・ケネディは第一のジョッキ氏〔93〕の耳もとに唇を寄せた。

——ミスタ・ドラドよ、とその唇は低い声でささやいた。

——ドラドか、とジョッキ氏はささやいた。

第一のジョ氏は信じた〔同上参照〕、ミス・ケネ〔93〕の言葉を、彼がドルであることを、彼女がドル、ジョ氏は。

彼はその名前を知っている、とささやいた。つまり、彼はその名前をよく知っている。つまり、彼はその名前に聞き覚えがあるということなの？　ドラド、そうだ。

そうだわ、と彼女の唇は前よりも高い声でいった、ミスタ・ドラドよ。例の歌はあのひとが唄ったのよ、とってもすてきだったわ、とマイナがささやいた。ミスタ・ドラドよ。それに『夏の名残りの薔薇』はとってもすてきな歌だわ。マイナはその歌が好き。ジョッキ氏もマイナの〔好きな〕その歌が好きだ。

「*それは夏の名残りの薔薇」〔1—161〕、ドラドを残して、「おくれて咲き」〔同上〕、ブルームは腹の中でガスがごろごろこねまわるのを感じた。

だいぶガスが溜ってるからな、あの林檎酒〔90〕で、それに便秘も。待てよ。ルーベン・J・の事務所〔1—181の「イスカリオテのユダ」の割注参照〔訳〕〕の近くに郵便局〔このホテルのあるアバ・オーモンド河岸通りのはずれに近い（少し先）にある〔訳〕〕が、一シリング八ペンスだけすぎ〔リフィ川に身投げして救われたルーベン・J・の息子の謝礼金がフロリン銀貨一枚（＝二シリング）では多すぎると〔訳〕〕いうサイモン・ディーダラス一流のジョーク〔訳〕〕。ずらかろう。グリーク・ストリート〔アバ・オーモンド河岸通りのはずれを右折すると、チャンサリ通りを経て続く〔訳〕〕を通ってうまく捲けないかな。会う約束なんかしなければよかった〔カニンガムに会う約束。第一二挿話参照〕。外のほうがのびのびする。あの音楽。神経にこたえる。ビ

ール・ポンプ〔109〕。「揺り*駕籠をゆする」彼女の「手は支配」。ホウズの丘〔1—89。再度Mの「ひんやりした手」(「鮮」)。「かな手つき」の割注参照)を連想〔訳〕〕。「世界を支配する」。

とおくで。とおくで。とおくで。とおくで。

かつ。かつ。かつ。かつ。

河岸通りを、ライオネル〔91〕リアポウルド〔90〕は歩いていった、いじわる〔96〕のヘンリ〔107〕がマディ〔95〕あての手紙を持って、「ラウルのために」〔1—174〕『邪淫の蜜』〔1—166〕を持ち、アクセサリーをもって、尖ったホースの彼に会った〔106〕をもってポウルディ〔88〕は歩きつづけた。

かつ、と盲目の〔1—173〕男が杖でかつかつ、と音を立てて、かつかつ歩道の縁石をかつかつ叩きながら、かつ、かつ、と近づいてきた。

カウリ〔111〕、あのじいさんはピアノに憑れている、アル中みたいなもの。だが、溺れるのもほどほどにしたほうがいい、「乙*女への男の道」と同様に。たとえば音楽きちがい。じっと耳をすまして。三十二分音符ひとつ聴きもらすまいとする。眼を閉じて。頭は拍子に合せて軽くうなずく。気がふれたみたい。身動きひとつにも勇気がいる。雑念厳禁。話すのはいつも趣味のことばかり。音符のことをべちゃらくちゃら。

けっきょく、音楽は話をしようとするようなものだ。途切れると不愉快になる、何をいおうとしているのか、はっきりわからないからだ。ガーディナ・ストリート〔そこの聖フランシスコ・ザヴィエル教会〕のオルガン。老グリン、年五十ポンド〔第五挿話参照〕。まったく変っている、あんな屋根裏みたいなところにたったひとりで、音栓とロックと鍵盤を相手に、一日じゅう「オ*ルガンの前に坐って」。何時間もだらだら話しつづける、ひとり言をいったり、送風機を踏んでいるそばの男に話しかけたりして。腹を立ててぶうぶういうかと思うと、金切り声で悪態をつく(耳に綿か何かをつめたらどうだろう、あ*ら、やめて、と彼女は叫ん

だ)、と、低くだしぬけに、ちょっぴり、わずかな、ちょっぴり、わずかな、かん高いそよ風の響き。

プー！　ちょっぴり、わずかなそよ風が、ウウウウとパイプを吹き鳴らした〔1—161〕。ブルームのわずかな、ちょっぴりが鳴らした。

——ほんとに奴がかい？　とミスタ・ディーダラスは、取ってきたパイプ〔95〕を手にもどって来ながらいった。今朝パディ・ディグナムの葬式であの男といっしょだったよ。

——ああ、主のご慈悲が彼にありますように。

——それはそうと、あそこのうえに音叉〔1—190〕がある。

かつ。かつ。かつ。かつ。

——妻君はすばらしい声をしている。それとも、していたというべきかな。どうだね、とリドウェル〔111〕が訊ねた。

——ああ、あれはきっとあの調律師〔1—174〕よ、とリディア〔109〕は「はじめて目のあたりにせし」〔85〕サイモン〔111〕ライオネル〔113〕にむかって云った、ここへ来たときに忘れていったんだわ〔1—174～175参照〕。

めくらなのよ〔1—173〕、と彼女は、ふたたび「目のあたりにせし」ジョージ・リドウェルにいった。だけどピアノを弾くのがとっても絶妙〔同上〕なの、聞き惚れてしまうわ。絶妙なコントラスト〔1—164〕、ブロンズリドと、マイナゴールド〔1—160参照〕。

——これぐれえでいいかい？　とベン・ドラドは、ウィスキーをつぎながら大声でいった。大声でいってくれよ！

——よし！　とカウリじいさんは叫んだ。

ルルルルルル。

もよおしてきたな。

かつ。かつ。かつ。かつ。かつ。

——すばらしいよ、とミスタ・ディーダラスは、頭のない鰯をじっと見つめながらいった。

サンドイッチの入った鐘形のガラス器〔84〕の中のパンの霊柩台のうえに、一匹の名残りの、一匹のさびしい〔110〕、夏の名残りの鰯〔112参照〕がのっていた。ブルームは「ひとり」*〔1—161〕。

——すばらしいよ、と、彼は見つめつづけた。とくに低音部が。

かつ。かつ。かつ。かつ。かつ。かつ。かつ。

ブルームはバリ商店〔アバ・オーモンド河岸通り洋服仕立て、旅行用品商J・M・B・〕の前を歩いていった。どこかでできるといいんだが。待てよ。僕にあの好運便器があったらな。あそこの一軒の建物〔上述の一二号の建物〕に二十四人もの事務弁護士。数えたことがある。訴訟また訴訟。「互に愛しあうべし」〔「ヨハネ」13 一三四〔訳〕〕っていうのに。洋皮紙の書類の山。委任状はきんちゃく、および、きり両弁護士のところにある。グルーディング・コリス・ウォード法律事務所〔112〕。

だが、例えば、でっかいドラムをぶったたいているあの男。彼の希望はミッキ・ルーニのバンドに入ること。どうやって最初にそんな希望を持つようになったんだろう。家で、キャベツづき屑肉料理を食べたあとで、肘かけ椅子に坐ってドラムを股の間に置く。自分のパートの下稽古をする。ドン。ドンドドン。なによりの女房孝行。驢馬の皮。生きているうちはさんざっぱら殴りつけ、死んじまってからはぶったたく。ドン。ぶったたく。どうやら、えーっと、二重面布（ヤシュマク）〔100〕、いや、キスメットだ。運命のこと。

かつ。かつ。盲目の〔113〕若者がかつかつ音をたてる杖を手に、かつかつかつとデイリの店〔1—174〕のウインドーの前までやってくると、そこにひとりの人魚〔同上〕が髪の毛を残らず風になびかせて〔同上参照〕（だが、彼には見ることができなかった）、人魚煙草をぷかぷか吸っていた（めくらだからできなかった）、人魚印、舌ざわりは天下一品〔1—174〕。

楽器。細長い草の葉っぱをほら貝の形に組みあわせた彼女の手のうえに、それから吹く。櫛に薄葉紙を巻いても曲が鳴らせる。西ロンバード・ストリート〔D市南岸。南北に走るロウアー・クランプ（ラッシル・ストリートから東に入る〔訳〕〕にいたとき、シミーズ一枚のモリ、髪の毛を波打たせて。どんな職業でも、それにふさわしい楽器を作ったと思うが、そうだろう？　猟師は霧笛（ホルン）で。む〔1—186〕。いうことをきかないのかい〔96〕？　鐘（クロッシュ・ソンネ・ラ）。を鳴らせ〔90〕。羊飼いには笛。巡査には呼子。プー、わずかな、ちょっぴりが〔114〕。ロックと鍵盤（キー）〔113〕！　煙突そおーじ、そおーじ！　四時の夜回りの、異常なし！　おやすみ！　「もうなにもかもおしまいだ」〔1—191〕。はて。ドラムは？　ドンドドン。待てよ、わかった。市の触れ回り役、市の執達吏だ。*のっぽのジョン〔101〕。「死人の眼をさます」ほどだ。ドン。ディグナム〔95〕。かわいそうな「*主の御名（ノミネ・ドミネ）」〔105参照〕。ドン。これが音楽だ、だが、もちろんみなドン、ドン、ドンにすぎない、ダ・カーポ〔音楽用語。演奏の指示として「初めから繰り返して」〕っていうのにちょうどあたる。だが、ひとにはよく聞こえる。おいちに、おいちに、とわれらは歩き、歩きつづける〔110参照〕。ドン。

ほんとに何とかしないと。ススー。ところで、ひょっとして宴会の席で、こんな調子でやっちまったらどうだろう？　ただ習慣の問題、ペルシア国王〔106〕。「祈りをとなえ、涙を」流せ〔110〕。それにしても、義勇騎兵隊長だと見ぬけなかったなんて、きっと若者はどこかがぬけていたんだ。すっかり身をくるんでいたからだ。墓地にいた、あの褐色の雨合羽の男はだれだったのかな。おや、辻君のお出ましだ！

黒い鍔広の麦藁帽を斜めにかぶったうす汚ない娼婦が、河岸通りの陽あたりの中を、寝ぼけまなこでブルームのほうにやってきた。「かの愛らしき姿はじめて目のあたりにせしとき」〔85〕?。たしかに彼女だ。とてもさびしいのです〔110〕。雨の夜、あの路地で。息子〔1—186〕。だれのがいうことをきかなくなったのかな？　彼は、む、彼女は見ていた。ここは彼女のなわ張りの外だ。なにをやっているのかな？　運がよければ彼女から。おにいさん！　パンツを洗ってあげましょうか、とでも。モリのことを知っていた。僕はどこかで見られていた。肥った女が鳶色の服をきたままやる。あれでは僕の棒も台

なしだ。約束はした、「きっと*」、まあ、「まず」守らないと知りながら。高くつきすぎる、『なつかしきわが家』〔106参照〕にあまりに近すぎて。僕を見ているな。昼間なのでひどい顔をしている。蠟燭みたいに生気のない顔。あんな女なんか消えちまえ。いや、いや、けっきょく彼女もひと並みに食べていかなくちゃ。ここをのぞいてみよう。

ライオネル・マークス〔アバ・オーモンド河岸通り[六号の骨董品、時計・宝石額縁商L・M・]〕骨董店のウインドーにならべられたいびつな燭台と、空気のもれる、虫喰いだらけの蛇腹のおんぼろアコーデオンとを、いかにも傲然とヘンリ・ライオネル・リアポウルド〔113〕、ヘンリ・フラウァ〔1—174〕様は、真剣な眼つきで、ミスタ・リアポウルド・ブルームはじっと見た。掘出しもの、六シル。弾きかたを習おうかな。安いし。女がいってしまってから。ほしくないときは、もちろんなんでも高いと思う。そこを心得ているのがうまいセールスマンというものだ。だから、売りたいものを買わせるようにする。僕の髭をそってみせて、そのスエーデン製の剃刀〔当時は最高〔訳〕〕を売りつけたあの男。刃を研いだからといって、余分にふんだくろうとした。ちょうど女が通りすぎるところだ。六シル。

きっとあの林檎酒〔112〕か、それとも、たぶんブルゴーニュ葡萄酒〔デイヴィ・バーンの店96で飲んだ〔訳〕〕のせいだ。

ブロンズの近くで、近くから、ゴールドの近くで、遠くから〔1—161参照〕、客はみな眼を輝かせ、威勢よく、グラスをたがいにかちかち触れあわせながら、ブロンズのリディア〔114〕の蠱惑的な『夏の名残りの薔薇』〔112〕、『カスティールの薔薇』〔109〕の前で、かちんと乾盃した。最初リド、ディ、カウ、カー、ドラ〔1—161参照〕、以上五度——リドウェル、サイ〔105〕・ディーダラス、ボブ・カウリ、カーナン、そしてふとっちょのベン・ドラド〔111〕。

かつ。ひとりの「若者が*」、ひと気のないオーモンド・ホテル〔110〕の玄関の「ホールへ入った」。

ブルームはライオネル・マークスの店のウインドーに飾られた凛凛しい勇者の絵をながめた。ロバート・エメット*の辞世の言葉。『最後の七つの言葉*』。マイアベーアのだ、これは。

――「諸君*のごとき憂国の士〔1―161〕は」

――そうよ、そうよ〔同上〕、ベン。

――「われらとともにグラスを」あげん。

みなはグラスをあげて乾盃した。

チリン。チャリン〔同上参照〕。

こつ。ひとりの眼の見えない若者がドアの敷居のところに立った。彼にはブロンズが見えなかった。彼にはゴールドが見えなかった。ベンも、ボブも、トム〔102〕も、サイも、ジョージ〔114〕も、ふたりのジョッキ氏〔105〕も、リッチ〔112〕も、パット〔同上〕も。エ、へ、へ、へ〔99〕。彼には見えなかった。

こうのブルーム、ユダ公のブルーム〔1―167〕は辞世の言葉を読んだ。声をひそめて。「わが祖国が世界のくにぐにに」。

プルルプルル。

きっとブルゴーの。

ススー。ウウ〔1―161〕。ルルプル。

「仲間いりするとき」。うしろにはだれもいない。あの女はいってしまった。「そのときこそ、そしてそのときまではぜったいに」〔1―161〕。電車、ガタン、ガタン、ガタン。チャンス。やってくるぞ。ガラガラガタンガタン。たしかにブルゴーニュのせいだ。間違いない。一、二。「わが墓碑銘は」。ガラアアアアア〔1―161参照〕。「書かれなくてはならない」。「これで」。

ププルルプススルルププススススス〔同上参照〕。

「終り」〔1―161〕。